

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

科学研究費助成事業 研究成果報告書



平成 30 年 5 月 31 日現在

機関番号：14701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02604

研究課題名(和文) 英語の統語的融合体の理論的・実証的研究

研究課題名(英文) A Theoretical and Empirical Study on Amalgam Constructions in English

研究代表者

松山 哲也(Matsuyama, Tetsuya)

和歌山大学・教育学部・准教授

研究者番号：90315739

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000 円

研究成果の概要(和文)：本研究は、wh融合体や透明的関係節などの英語の融合体について、先行研究の理論的・経験的問題を明確にし、極小主義(Chomsky 2000, 2001)の観点からその代案を示した。研究成果としては“The Syntactic Structure of Wh-syntactic Amalgams” English Linguistics (32: 78-101) と “Transparent Free Relatives As Specifying Coordination” English Linguistics (34: 235-265) を挙げるができる。

研究成果の概要(英文)：The aim of our study is to explore syntactic structures of amalgams like wh-amalgams (John ate I don't know what.) and transparent free relatives (TFR) (John is what you call a bookworm.) in terms of Chomsky's (2000) minimalist theory. Some of the findings have been published in English Linguistics 32 (p.78-101) under the title “The Syntactic Structure of Wh-syntactic Amalgams” and in English Linguistics 34 (p. 235-265) under the title “Transparent Free Relatives As Specifying Coordination.” The former identifies problems with Kluck's (2011) sluicing analysis of wh-amalgams and proposes an alternative analysis, according to which we consider what to be the head of the whole expression and the rest to be a type of parenthetical. The latter analyzes TFRs as small clauses with the wh-clause and the pivot of the construction mediated by Koster's (2000) colon head. Our analyses successfully account for core properties of the amalgams and overcome difficulties that previous accounts faced.

研究分野：統語論

キーワード：融合体 wh融合体 透明的自由関係節 主語接触関係節

1. 研究開始当初の背景

英語では、2つの命題内容を連結して複合的な情報を表わす際に、節同士を連結する接続詞や関係代名詞が用いられる。ところが、Lakoff (1974)で指摘されたように、2つの命題内容が接続詞等なしで一体化し1つの節として表現されることがある。この種の表現を融合体という。例えば、(1a)のwh融合体は、2つの命題(John invited people to his party +you'll never guess how many)が融合し1つの節を作っている。同様に、(1b)の接触節は、there's a lot of people と a lot of people don't know that が融合一体化している。

(1) a. John invited *you'll never guess how many people* to his party.
(Lakoff (1974:321))

b. There's *a lot of people* don't know that. (Lambrecht (1988:319))

c. He made *what may appear to be a radically new proposal*.

Kajita (1977)で指摘された(1c)の Transparent Free Relative (TFR)も、関係代名詞の what があるものの、he made a radically new proposal と *what may appear to be* a radically new proposal が一体化している点で融合体の一種と考えられる。

融合体は2つの特異性がある。第1に、斜字で示された連鎖(*you'll never guess how many*)が、内的には「節」の構造をしているものの、名詞句に特有の位置に生起している。便宜上、この連鎖を介入節(interrupting clause)と呼ぶ。第2に、下線の要素(以後、「核(nucleus)」)が、介入節の一部であると同時に、主節動詞(invited)の構成

であることである。これらの特性をどのように説明するのかが、融合体研究において主要な課題となっていた。

Guimarães (2004)と Kluck (2011)は、極小主義の枠組みで wh 融合体を詳細に研究した。これらは、Lakoff (1974)以来注目を受けなかった融合体の研究を大きく前進させた点で意義が大きい。課題がないわけでない。第1に、Guimarães (2004)の分析は、Kluck (2011)で検討されているが、Kluck(2011)の検証自体は進んでいなかった。第2に、2つの研究に基づく言語資料は、内省による作例が多くを占めている。融合体の自然の姿を知るには、コーパスなどの自然な発話から実例を収集する必要がある。第3に、2つの研究は主に wh 融合体である。TFR と「接触節」を扱っていない。

2. 研究の目的

本研究は3つの目的があった。第1に、従来の研究で観察された融合体の特徴を踏まえたうえで、種々の言語資料から広範囲のデータを収集して、それに母語話者の内省もうまく組み合わせて、より詳細に融合体の特徴を記述することである。

第2に、上記の事実調査結果に基づいて、(i)「介入節」の内部構造、(ii)「核」要素と主節要素の関係、(iii)介入節と主節との関係の観点から、先行分析の理論的・経験的問題を明確にする。

第3に、極小主義の枠組み(Chomsky 2000, 2001, 2008)で先行分析に対する代案を提案することである。

3. 研究の方法

本研究は、次の4つの点を重視して行われた。(i) 融合体の文献からの言語資料ばかり

りでなく、種々の言語資料(コーパス、小説、文法書、辞書)から多くのデータを収集して、それに英語母語話者の内省もうまく組み合わせ、より詳細に融合体の記述を行う。

(ii) (i)から得られたデータを整理・分類し、類似構文と比較・対照させながら、融合体の一般的特徴および固有の特徴を抽出していく。(iii) (ii)から得られた特徴を踏まえつつ、融合体の主要な分析の妥当性を検証していく。(iv) 極小主義の枠組み(Chomsky 2000, 2001, 2008)で先行分析に対する代案を提案する。

4. 研究成果

本研究は、英語の融合体について、先行分析の理論的・経験的問題を明確にし、極小主義の観点からその代案を示すことであった。主な研究成果としては“The Syntactic Structure of *Wh*-syntactic Amalgams” *English Linguistics* 32: 78-101 と “Transparent Free Relatives As Specifying Coordination” *English Linguistics* (34: 235—265) を挙げることができる。

前者では、Kluck(2011)の Parenthetical Merge による分析では、sluicing の義務性、介入節の構成素性、融合体からの *wh* 句の抽出が説明できないことを指摘し、それらは Huddleston and Pullum (2002)の複合句分析を援用することで解決できることを示した。

後者では、Transparent Free Relatives(TFR)の主要な分析—関係節分析(Grosu (2003))、挿入節分析(Schelfhout et al (2004))、多重支配分析(Riemsdijk (2006))—を批判的に検証し、その代案を極小主義の観点から示した。TFR と指定的疑似分裂文が並行的に振る舞うことに着目し、TFR を指定的疑似分裂文の一種であるという分析を行った。この分析は、TFR の「核要素」が範疇の一致や数の一致に関して透明性を現わすことを説明でき、さらに先行研究の問題を解決できることを示した。

5. 主な発表論文等 (研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

1. “Transparent Free Relatives As Specifying Coordination,” Tetsuya Matsuyama *English Linguistics* 34, p.235 - 265, 2018. (査読有)
2. “On the Syntactic Structure of the Presentational Amalgam Construction,” Tetsuya Matsuyama 『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』 67 号 p.121-127, 2017 年 (査読無)
3. “A Note on Transparent Free Relatives,” Tetsuya Matsuyama, 『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』 66 号 p.59-67, 2016 年 (査読無)
4. “The Syntactic Structure of *Wh*-syntactic Amalgams,” Tetsuya Matsuyama, *English Linguistics* 32, p. 78 - 101, 2015 (査読有)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計2件)

1. 『ことばの思想家 50 人 重要人物からみる言語学史』、中島平三監訳、朝倉書店、2016 年、(「クルトネ(p.131 ~ 135)」、「ファース(p.174 ~ 178)」、「ヤーコブソン(p.184 ~ 188)」を翻訳)
2. 『<不思議>に満ちたことばの世界(下)』、高見健一他(編)、開拓社、2016 年、(「WH 融合体」(p.126-130)を執筆)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6．研究組織

(1)研究代表者

松山 哲也(Matsuyama, Tetsuya)
和歌山大学・教育学部・准教授
研究者番号： 90315739

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()